

ラフカディオ・ハーンとジョージ・ワシントン・ケイブル： 「クレオール」の文学という視点から

梅本 順子

Junko UMEMOTO. A New Orleans Friendship: Lafcadio Hearn, George Washington Cable and Creole Literature. *Studies in International Relations* Vol. 34, No. 2. February 2014. pp. 57 – 66.

In this article I trace the friendship of Lafcadio Hearn and George Washington Cable and the interest they shared in Creole literature. Initially attracted by Cable's novels, Hearn struck up a friendship with Cable in New Orleans, where together they enjoyed collecting Creole songs and poetry. The friendship brought benefits to both. Hearn helped Cable by writing favorable reviews of his books that protected him against white Creole hostility. And Cable introduced Hearn to some important publishers that ultimately led to an assignment in the West Indies. Hearn subsequently traveled from there to Japan. The friendship was also important in the writing of Hearn's novel *Chita*. Their friendship gradually deteriorated, however, although there is no record of this on Cable's side. It is said that Hearn was envious of the good relations between Cable and Henry Krehbiel, an old friend of Hearn's, and that relations suffered in the wake of criticism directed at Cable by the New Orleans press after his views on race and the Black Code became increasingly radicalized in the 1880s.

はじめに

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904）は、ジャーナリストや作家たちとの交際に、異常と思われるほど入れ込むものの、その時期を過ぎると一方的に返信すら断ってしまうことを繰り返してきた。相手によって交際期間の長短はあるものの、文人たちとの交流によって、ハーンは文学の道に生きるための糧を得てきたといっても過言ではないだろう。また、交流相手にしても、ハーンのひとりよがりともいえる態度に腹を立てるものの、ハーンの伝記や書簡集の編集の際には積極的にかかわろうとした人も少なくなかった⁽¹⁾。

今回取り扱うジョージ・ワシントン・ケイブル（George Washington Cable, 1844-1925）との交流も、そう長くはつづかなかったものの、その交流がハーンの文学活動に与えた影響は決して少なかつた。ケイブルを通して、クレオールの方言と文化への関心が高まり、それが西インド諸島訪問へとつながったからである。また、ケイブルから得た情報をもとに、ハリケーンに遭遇して孤児

となり、漁師に育てられた白人クレオールの少女を描いた小説『チタ』（*Chita*, 1887）が生まれたといわれる⁽²⁾。

さらに、ハーン本人がケイブルに触発されて関心をもっただけでなく、物理的にケイブルの紹介があったからこそ、『ハーバー』や『センチュリー』の各誌に寄稿することが可能になったのである⁽³⁾。その結果、ハーバー社との関係は西インド諸島の取材にとどまらず、最終的には日本へとつながってゆくのであった。

ハーンとケイブルの交流は、ニューオーリンズでの数年を経て途絶えてしまったが、ケイブル研究者のアーリン・ターナー（Arlin Turner）によれば、ケイブル側からのハーンを批判する記述は見つかっていないとのことである⁽⁴⁾。ハーンにとってのニューオーリンズは、まさに異文化体験の場であり、クレオールを描いたケイブルとの出会いは、ハーンの商品の中に生きることになった。

ところで、ハーンはどのようにケイブルを知りえたのか。それには、ニューオーリンズに来る前のハーン的生活がある。オハイオ州、シンシナティ

でのハーンは、社会部の記者として変わった事件や社会の諸相を取扱い、ときには突撃レポーターさながらの体当たりで、その感想を記事にしていた。「ドリー：波止場の牧歌」(“Dolly – An Idyl of the Levee”) などのような文学的な作品もあるが、シンシナティ時代のハーンはやはり社会部の記者であった。

そんなハーンに変化が起きたのは、黒人の血が混じる女性との結婚である。北部とはいえ異人種間の結婚に対する壁は高く、彼の活動は制約を受け、最初に勤めた新聞社を辞めざるをえなかった。振り回された挙句、その当事者である彼女が出奔してしまい、ハーンの懊悩は増していた。ハーンにとって起死回生を図るには、活動の場を変えるしかなかったのであろう。

ところで、ケイブルの小品「ジャン・ポクラン」(“Jean-ah Poquelin”, 1873) をニューオーリンズへとハーンをいざなった理由の一つとして挙げる研究者もいる。また、ハーンと交際のあったシンシナティ時代の記者仲間の語る魅力的な南部のイメージを挙げるものもある⁽⁵⁾。公私ともに行き詰りを感じていたハーンは、結局シンシナティを脱出することに賭けたのだった。

フランス語が得意なハーンにとって、ニューオーリンズは言葉を活かせる場であることも幸いした。つまり、旧大陸フランスの面影を色濃く残すニューオーリンズの、ほかのアメリカの都市にはない特徴がハーンを引き付けたのである。たとえば、「ジャン・ポクラン」は、クレオールを歴史を知って初めて理解される作品なのである。すなわち、アングロ・サクソン系の流入の中で、地域から孤立したクレオールの老人の秘密が中心になる。いろいろ噂されるばかりか、周囲から執拗な迫害を受けながらも、ハンセン病の弟を数十年の長きにわたって匿っていたことが、老人の死で明かされるという物語である。

1803年のアメリカへの譲渡まで、フランス領として存続していたルイジアナの中心都市ニューオーリンズは、フランス系白人を中心に作り出した文化と、譲渡後に北部から入る移民が織りなすアメリカ系の二つの文化を擁していた。ハーンが移住したころも、クレオールと呼ばれるフランス系の

人々が母語のフランス語を用い、フランス語の書籍や新聞を発行し、フランス風の文化の維持に努めていた。ルイジアナのクレオールとは、フランス系と若干のスペイン系白人のみならず、混血や黒人を含む場合もある。ただし、その文化の中心はあくまで白人であり、混血や黒人に対する差別は19世紀前半よりも、奴隷の解放が行われた南北戦争後の方が悪化していた。黒人奴隷は解放されたものの、再建時代を経て、人種差別が再燃した。結局白人は、解放された黒人の行動を規制するために「ブラック・コード」を施行し、差別を正当化した。こうして、公民権法の成立まで、有色人種は厳しい差別のもとにおかれることになったのである。

ケイブルやハーンが活動したのは、このような過渡期の不穏な時代であった。ニューオーリンズの白人は北軍に蹂躪された南部としての被害者意識に加え、戦後流入した北部人(ヤンキー)の増加を苦々しく思っていた。彼らが多年にわたりニューオーリンズに築いてきた文化の存続が危ぶまれると受け止めたからである。ジャン・ポクランの近隣のように、船での行き来に利用されていた運河(bayou)が埋め立てられてしまうと、外見が変わるだけでなく、そこで維持されてきた文化も失われかねない。そのような気配が様々な局面で漂っていたのである。それだけに、フランス系住民の、ケイブルが描くクレオールを見る目は冷やかだだった。ノスタルジアを誘うようなところがあればあるほど、かつての栄光を意識させられることになったからかもしれない。

ハーンとケイブルの交流はクレオールの町を背景に、その特殊な言語への関心とそれを使用した創作を通して行われたといえるだろう。本稿ではまずケイブルの生い立ちに触れたのち、彼を取り巻く周辺の人々の生きざまに言及する。次にハーンとケイブルの文学的な交流について「クレオールの文学」をキーワードに試みてゆくことにする。

ケイブルとその周辺

ここで少しケイブルの略歴に触れておきたい。

ケイブル自身はニューオーリンズで誕生したものの、父母ともに北部人であった。育った周囲のクレオールはカトリックが大半であるのに対し、ケイブルは母親が敬虔なプロテスタント（長老派）であったことから、彼自身も厳格な信者になっていた。体軀は小柄で貧弱だったが、二十歳のころには南軍の兵士として南北戦争を経験している。

父を早くに失ったケイブルは、最初から作家を目指したのではなく、会社勤めや統計局での仕事の傍ら、『スクリブナーズ・マンズリー』（*Scribner's Monthly*）の“Drop shot”というコラムにさまざまなクレオールの人々が登場する作品を発表してきたのである。まだこのときはクレオール社会を刺激するほど過激な内容のものはなかったものの、人種差別反対の姿勢はそのころすでに培われていた。その背景には、南部の再建期に施行された「ブラック・コード」による締め付けがあった。ケイブルは小説家に留まることなく、有色人種の人権へと関心の比重を移していったのである。

ちなみに、1875年、ケイブルは市内の女学校の共学阻止を図る白人優越主義者の団体に抗議し、『ニューオーリンズ・ブレティン』（*New Orleans Bulletin*）に反論を書き、政治活動への萌芽がみられる。さきの『スクリブナー』に発表してきた短編をまとめて、『古きクレオールの時代』（*Old Creole Days*, 1879）として発表したものの、まだこの段階では、白人クレオールの側からの抵抗は見られなかったのである。

その翌年に発表した、長編の『グランディシム一族』（*The Grandissimes*, 1880）になると、白人クレオール社会の強い反感を招くことになった。この作品は、『古きクレオールの時代』同様、舞台を執筆した時より50年ほど前の時代に設定しているにもかかわらず、鋭い批判の声が上がった。それには、この作品の底流には、間接的とはいえ人種差別反対のケイブルの存在が見え隠れするからである。

これ以降、クレオール社会の脅しや圧力にもめげずに、ケイブルは数年にわたってそのまま執筆を続けたものの、最終的には1884年に発表した「解放された黒人にとっての正義について」（“The Freedman's Case in Equity”）を最後に、ニュー

オーリンズを去ることになったのである。ケイブルの人種差別反対を唱えたこの主張が、一夜にしてそれまでの名声を失わせたとする意見もあるほどである⁽⁶⁾。

『グランディシム一族』の作中人物の黒人に対する同情的な発言や行動は、白人のクレオールをひどく刺激することになった。たとえば、プランテーションの黒人を解放することにした当主のオノレをはじめ、いったん逃がしておいた黒人の女を何のためらいもなく後ろから撃ち殺す白人の男たちなどの人物造形が、白人のクレオール社会には許しがたいものとして受け止められた。

批判に回ったクレオールの一人がハーンと文学を通して親しく交流した、アドリアン・エマニュエル・ルーケット（Adrien Emmanuel Rouquette, 1813-87）神父である⁽⁷⁾。ルーケットのケイブル批判がもとで、当時ケイブルに心酔していたハーンはルーケットとの交際を絶つことになったといわれる。これがどのような意味を持つか。ここで、ルーケット神父とハーンの関係について少し触れておく。

キリスト教嫌いを表明することを憚らないハーンであるが、ルーケット神父との交流は例外であった。ルーケットは、ニューオーリンズ郊外のチョクトー族の部落に分け入って、なりふり構わず布教を続けた神父として、部族からは“Chahta-Ima”（私たちの一人）という称号を受け、部族の一員として活動できるほど信頼を勝ち得ていた。また、南北戦争中は北軍の支持者で、北軍がニューオーリンズに入場してくるとすぐに忠誠を誓ったという、いわば変わり種の人物であった。ハーンもそのような型破りのルーケットに惹かれていたといえるだろう。

ハーンとの交流が始まったのは、ハーンの文才を認めたルーケットの好意による。ルーケットが書いた『新アタラ』（*La Nouvelle Atala*, 1879）は、シャトーブリアン作の『アタラ』をベースにした作品である。混血の少女の自然とのふれあいが描かれたこの作品に感動したハーンは、好意的な書評を書いた。これに心を打たれたルーケットが、ハーンの「ルイジアナの牧歌」（“Louisiana Idyl”）と題する書評を、自著の末尾につけて出版してく

れたことで二人の交流が始まる。ハーンとしては、新聞記事以外で、自分の書いたものが出版された初めての経験であった⁽⁸⁾。

ハーンは異文化の中に生きる神父の生き様に加え、その作品にも感じるところがあって交際が始まったものの、ケイブルを攻撃する冊子 (*Critical Dialogue between Aboo and Caboo on a New Book: or Grandissimes Ascension*, 1880 新本に関するアブーとカブーの討論；もしくはグランディシム昇天) をルーケットが出したとわかった時、二人の関係は途絶えることになった。匿名だったものの、著者がルーケットであると断定できるような冊子まで出して、ケイブル作品に異を唱えた神父のやり口は、ハーンには許しがたいものと映ったらしい。これにより、ハーンはルーケットとの関係を絶った⁽⁹⁾。

この冊子は、『グランディシム一族』が19世紀前半を舞台としていることから、その時代のクレオール社会の霊と、1880年代のその子孫の霊が対話をするという形式で、祖先のクレオールの描き方や、黒人や混血の人々に関してどう接することが正しいのかが批判的に述べられている。冒頭でもふれたターナーは、ルーケットにとってのケイブルの立場を“more than a casual acquaintance”と呼び、ハーンを“a close friend”と著している。匿名にしたのはそのせいであり、ルーケットのこの冊子はクレオール社会全体の反応を代弁したにすぎないという。また、二人の相違として、ケイブルは作品に見るようにリアリストであったのに対し、ルーケットはロマンティストだったと述べている⁽¹⁰⁾。

一方、ケイブル研究者のジョン・クレマン (John Cleman) は、ケイブルがハーンの友人と知っていてこの類の冊子を出したことに、ルーケットの悪意を感じるという。ルーケット自身、北軍に賛成し奴隷反対を唱えていたのに、ケイブルの行動に対しては貧弱な体軀をあざけり、さらにはヴェドゥの女王といわれるマリー・ラザーとの関係をほめかすといった悪質な内容のものであったと述べている⁽¹¹⁾。

おおかたの白人クレオールは、ケイブル作品が北部人に媚びて、北部人が共感するような筋立て

になっていると主張して、批判する理由にしていた。ハーンのアイテム紙 (*The Item*) に出した『グランディシム一族』 (*The Grandissimes*) の書評は、「この本は洗練されているという利点があるものの、クレオールの町の住人に気に入られるかどうかは疑わしい。ケイブルの姿勢は、仲間内ではひどく批判されていた。この町に住むものにとって彼の描写は必ずしも気持ちのいいものではなかったのである。」と、クレオールからの批判を見越したうえで、最後に一読を勧めている⁽¹²⁾。ハーンの視点の先には、ルーケットをはじめとした白人クレオール社会の反感があったことは明らかである。この書評は短いながら、こまごました人物評には触れることなく、ケイブルの描写の力を強調し、まず一読するよう訴えるものとなっている。

さらに1882年以降ハーンが記者として勤めた『タイムズ・デモクラット』紙 (*The Times Democrat*) の文芸部長 (マリオン・ベイカー, Marion Baker) はケイブルと親しかったが、そのマリオンでさえもやがてケイブルに異を唱えるようになる。というのも、同じ『タイムズ・デモクラット』紙の編集長をしていた、マリオンの兄にあたるページ・ベイカー (Page Baker) のケイブルに対する厳しい姿勢があった。その結果、ケイブルが記事を發表できなくなったともいわれる。また、ハーンのケイブル作品に対する論調が変わったのは、そのようなページの影響があったという説もある⁽¹³⁾。

ケイブルが人種差別に関して政治的発言を強めるにつれ、ニューオーリンズのクレオール系の作家や歴史家の、ケイブルに対する反応は厳しいものになっていった。先にも触れたようにニューオーリンズは独自の文化を開花させており、白人クレオールによって牽引される文化に誇りを持っていた。それがニューオーリンズに生まれたとはいえ、クレオールにすれば北部を代表するようなよそ者であるケイブルの視点から描かれることに、反感や憤りを覚えたのであろう。たとえば、ニューオーリンズのクレオール系の歴史家であり作家であった、チャールズ・ゲヤール (Charles Gayarré, 1805-95) などもやがてケイブル批判に回るようになったのである⁽¹⁴⁾。

しかしこのような批判で、ケイブルが筆を折る

ようなことはなかった。その主張は次第にもっと過激なものになっていった。クレオール社会から北部寄り一蹴されても、北部人の知らない南部を発信することに余念がなかった。ニューオーリンズ近隣の住民に対して、その社会が持つ潜在的な問題を意識させるための啓発活動にとどまらず、ケイブルの視点はもっと先の世界を見つめていた。ただ、ケイブルの人種発言は、ケイブル個人への弾圧にとどまらず、ケイブルが発表しようとする雑誌社や新聞社への圧力を招いた。こうして活動が制約されることになったのである。

これまで述べてきたように、白人クレオールからの様々な圧力にもめげずに、持論を曲げなかったケイブルは、南部という枠を超えて時代の変化に耐えうる作品を残し、現在も記憶される作家となった。しかし、そのクレオール性にこだわり閉ざされた空間に留まるこの地の人々は、芸術家と称しても外で勝負するようにはなりえなかった。マルティニークへの渡航直前のハーンと短期間ながら文学的交流を持ったクレオールの文学少女、レオナ・ケイロウセ・バレル（Leona Queyrouze Barrel, 1861-1938）の場合がその一例である。

彼女はニューオーリンズ在住のルイス・プラシッド・カノンジュ（Louis Placide Canonge, 1822-93）などのクレオールの文学者の影響を受けたとされる。彼女は、自分の作品がニューオーリンズ以外の世界で通用するかを試そうとして、一度はニューヨークに出かけたものの、その限界を知り再びニューオーリンズにもどらざるをえなかった。クレオールの文学少女の夢は、自分が受け取ったハーンからの書簡を、晩年に日本の北星堂より、『牧歌：ラフカディオ・ハーンの思い出』（*Idyl: My Personal Reminiscences of Lafcadio Hearn*, 1933）と題して出版したことでやっと結実した次第である⁽¹⁵⁾。

描かれたクレオール

ハーンがケイブルに接近したのは、もちろんケイブルの文学作品の魅力にひかれてであった。ケイブル文学の魅力とは、南部という地域が持つ特徴ある文化をその作品に封じ込めたことにある。

すなわち、のちのフォークナーにつながってゆくような南部という地方色豊かな作品をつくりあげたことだった。そしてその中心となったのが「クレオールの文化」であり、その作品はクレオールのとでも呼ぶべき要素で満ちている。

クレオールの要素という、まず言語の問題があげられる。そして、クレオールの人々の置かれている社会的背景である。本稿では、まず言語の問題からみてゆきたい。

フランス語でも英語でもない、方言の使用がケイブルの特徴となる。初期の作品、『古きクレオールの時代』の各作品、並びに『グランディシム一族』などは方言で書かれているといっても過言ではない。また随所にクレオールの歌や詩がちりばめられている。特に『グランディシム一族』にはその例が多くみられる。ハーンはシンシナティ以来の友人で音楽研究家のヘンリー・クレイビール（Henry Edward Krehbiel, 1854-1923）宛の書簡で、ケイブルが最初にハーンに約束したよりも、出来あがった作品に挿入されたクレオールの歌の数が減っていることを残念がった。また、別の書簡では、黒人女性にブドゥの歌を歌ってもらい、自分は音感がないので、それをケイブルに書き留めてもらったことなどを述べている⁽¹⁶⁾。

ハーンもケイブルも町で耳にする歌の収集に努め、それを持ち寄って情報交換をしていることが読み取れる。とくに音楽家のクレイビールとケイブルは1878年には交流が始まっており、ハーンを含めた三人が歌の収集という同じ目標をもって、それぞれ活動していた。なお、ハーンは先のクレイビール宛の書簡で、色が黒い歌い手ほど、イントネーションに奇妙な特徴があると、自分なりの発見を述べている⁽¹⁷⁾。

また、ケイブルは白人、混血、黒人とクレオールであっても人種ごとに言葉を使い分けており、言語に関するケイブルの姿勢が、作品にクレオールらしさを与えていることをハーンはしっかり把握していた。引き続き、ハーンが述べたケイブル評の中から言語への関心を示したのを見てゆくことにする。

ハーンが発表した文学論にケイブルの名前はたびたび登場する。とくに、クレオールの言葉（方

言patois)を多く用いたケイブルの作品は、ハーンのおきにいらったといえよう。クレオール方言に強い関心を持ち、方言による詩、もしくは歌詞を採集していたハーンは、しばしばケイブル本人やその作品について語っている。「成功している文学」(“Successful Literature”)のタイトルで書かれたエッセイの中には、「ニューオーリンズについていうならば、最も成功しているペンの魔術師は、目下スクリブナー誌を卒業したケイブル氏である」⁽¹⁸⁾の一文が光る。

ハーンが書いた文学に関する記事は、のちに『アメリカ文学評論』(Essays on American Literature, 1929)と題して出版されたが、先の「成功している文学」だけでなく、数編にケイブルの名前は登場する。ちなみに「小説家と小説」(“Novelists and Novels”)と題するものにいたっては、「もっとたくさんケイブルが出て、東部の作り物とは異なる、生き生きとした影響を文壇に与えてくれることを望む」⁽¹⁹⁾といったハーンがケイブルに対する最高の賛辞が見られる。生き生きとした影響とはケイブルが使用するリアリステックな描写からくるものである。とくにケイブルならではの方言の取り扱いをハーンは高く評価した。

ところで、ハーンが書簡の相手となったクレイビールはハーンが音楽への関心を目覚めさせた人物でもある。また、先に触れたように、方言(patois)が汎用されるケイブル作品に関心を持っていたハーンは、クレオール方言による歌や詩を積極的に集めていた。シンシナティ時代から「語り」への関心はすこぶる高かったが、ニューオーリンズに来てからその傾向は一層強くなった。この傾向はやがて日本での活動に引き継がれた。たとえば、「耳なし芳一」で使用した「かいもん閉門」という言葉(敢えて文中に日本語を使い、注で意味を説明)のように、ハーン文学の特徴は、その語の持つ響きを重視したことにみられる。

一方、ケイブルは自ら収集したものを歌って聞かせている。のちに数か月にわたりマーク・トゥエインとともに、朗読や歌で舞台に立ちながら各地を回っており、ケイブルには歌を聞かせる才能があったといえるだろう。この点で、音楽家のクレイビールとは共感できるものを持っていた。の

ちにハーンは自分が集めた歌詞をクレイビールに知らせ、ケイブルには見せるなど断りを入れたにも関わらず、クレイビールとケイブルが親しくなったことに立腹したのであった⁽²⁰⁾。

ハーンが言葉への関心は、すでに触れたケイロウセとの交流にも表れていた。彼女の方からの働きかけで、家に入出入りするようになったハーンは、西インド諸島に渡る前に、彼の地の出身である、ケイロウセのメイドから方言を学ぶことになった。ハーンは、この成果をのちに『ゴンボ・ゼーヴ』(Gombo Zhebes, 1885)と題する現地語の諺集として出版した。

また、ハーンが言葉を中心としたクレオールへの関心の高さは、没後『クレオール・スケッチ』(Creole Sketch, 1924)、ならびに『アメリカ雑録2巻本』(The American Miscellanies, 1924)にまとめられたクレオールに関する記事の多さからも明らかとなる。前者は、1922年の『ハーン全集』(The Writings of Lafcadio Hearn, 1922)に入っていないもの13篇も含めて44編からなっている。その中から、歌や詩を多く含むものをぬきだすと、“Charcoal,” “Songs of the Sea,” “A Creole Song”などがあげられる。ほかにも内容に歌を含むものが数多くあり、ハーンは記事の中で、珍しい歌の提供を読者に呼びかけている。また、後者で紹介した作品にも言語に関わるものが再録されている。“The Creole Patois,” “Some Notes on Creole Literature,” “A Sketch of Creole Patois”などである。

ケイブル同様、ハーンもフランス語のみならず、多くのクレオール訛りを導入して作品を仕上げていた。ただしハーンが描いたものは短編小説ではなく、ほとんどが地元で題材を求めたエッセイだった。ケイブルの描くような小説とは異なり、混血や黒人たちの暮らしの中に歌や音楽を求め、時には、それらにユーモアを交えて紹介している。ちょっとしみりしたり、ときには笑ったりで、手軽に読めるような作品となっている。

次に、クレオールの特徴を浮き彫りにする、社会的背景に焦点を当ててみてゆく。まずケイブルは、クレ奥ールの小品を『スクリブナーズ・マンスリー』に発表している。それらをまとめたのが、代表作の一つ『古きクレ奥ールの時代』である。

先に紹介した「ジャナ・ポ克蘭」をはじめ「美しい令嬢のプランテーション」(“Belles Demoiselles Plantation”), 「ジョルジョ氏」(“Sieur George”) など7編からなる。この作品集の再版のおり(1883)には独立して出版されていた「デルフィーヌ夫人」(“Madame Delphine”)も加わった。いずれも、クレオールが主人公の作品で、時代は19世紀前半、南北戦争の前ということになっている。

ケイブルの物語は、すでに述べたように、リアリステックな取り扱いである。いずれの社会背景も史実に基づいたものであるだけに、のちにハーンが書いた「ケイブルのロマンスの舞台」(“The Scenes of Cable’s Romances”)⁽²¹⁾という書評は、作品に登場した邸宅やカフェなど、現存する建築物をたどるものとなっている。1884年から85年にかけてニューオーリンズで開催された博覧会(綿花輸出百年記念であり、世界の教育者会議も同時に開催)を見学に訪れた観光客にとっては、ハーンの書評はニューオーリンズ紹介の恰好なガイドとなったのであった。もちろんケイブルの著作が関心を集めたことは言うまでもない。

ケイブルは、1870年代から80年代にかけてという実際に執筆した時代ではなく、それより遡ること半世紀の昔をいずれの作品においても舞台に設定した。それは南北戦争前の1830年代や40年代であった。この時代、白人クレオールは、旧大陸の遺産を一層大切に守って生きていた。白人のプランテーションのオーナーと黒人奴隷、また、混血がそれぞれ与えられた場所で従来の価値を守って生きていた時代である。ある意味では、古き良き時代を舞台にしたおとぎ話とでもいえる設定なのである。

同じクレイビール宛の書簡の中で、ハーンは、「小さいプーレット」(“tite Poulette”)よりは「ジャナ・ポ克蘭」や「美しい令嬢のプランテーション」を読むことを勧めている⁽²²⁾。「ジャナ・ポ克蘭」の筋については、すでに述べたので省略するが、超自然的なものに関心が芽生えていたハーンにとってゴシック調の取り扱いが、特に気に入ったのではなからうか。もう一つの「美しい令嬢のプランテーション」は、その名の通り、プランテーションに立つ荘厳な構えの館が象徴的である。娘

たちに請われて、便利な町中に家を持つとする父。交渉相手はこの父親と父系の祖先を同じくする「オールド・チャーリー」(ケイブルの造語で Injin Charlie または old Charlie) と呼ばれている男である。このチャーリーの祖先にはチョクトー族の血が混じっている。結局、交渉がまとまらないうちに、洪水のために、美しいプランテーションは、そこに暮らす大事な娘たちもろとも失われてしまう。目の前で娘を奪われた老人の喪失感を描く一方、皮肉にもそんなみじめな老人の最期を見届けるのは、チョクトー族出身の祖先をもつという理由で差別されてきたチャーリーだった。どちらの作品も、アメリカ化の進展の中で、次第にその存在感を失いつつあるクレオール社会の行く末を象徴しているかのような余韻を残す作品である。

「小さいプーレット」は、混血の娘の結婚問題であるものの、その完成度においては、同じテーマをとり扱う「デルフィーヌ夫人」に軍配が上がるというのがハーンの見方であろう。その「デルフィーヌ夫人」という作品は、混血の表題の夫人が、白人との間にできた娘をあるいきさつから手元に引き取るものの、自分の本当の娘ではないと偽って、白人男性と結婚させるための過程が描かれる。

これには彼女の偽りの証明に加担して、白人として嫁がせることを成功させた白人神父の役割が大きい。クレオール社会で混血として生きることがどんなに大変か。また、白人でないと正式な結婚をして幸せになれないということが背景にある。彼女の娘が結婚しようとしている白人はかつて海賊と関係があり、密輸にもかかわっているという疑いがあるのだが、裕福である。どのような人物であっても白人なら相手としてふさわしいのか。また、聖職者が一人の女性の将来を考え、そのために虚偽の証明に加担するところにケイブルの意図が覗かれる。

もう一点、風刺がきいた「ジョルジョ氏」(“Sieur George”)に触れたい。名前からして、ジョージ・ワシントンのジョージであるものの、その行動からはとうてい「氏」をつけるような人物ではない。この男はクレオールが住む古いアパートの一室を

借りていたが、ひとしきりいなくなると、かわりに二人の女が住んでいる。最後にまた男は戻ってくるのだが、この男が数十年前に住みだしたときから大事にしていた毛皮のトランクが好きな家主の目を引く。最後にトランクの中身は「ハバナくじ」という宝くじのはずれ券でいっぱいであったことがわかる。

この男は知人の妻子を世話していたこと。並びに留守にしたのは米墨戦争に出かけていたことがやがてわかる。また、母親に死なれた娘が、引き続き自分をここにおいてほしいとこの男に頼むと、自分と結婚するなら可能だといって娘を追い出すあたりは、モリエールの「女房学校」を連想させるという⁽²³⁾。

家主と店子のユーモアがあふれるやり取りは、ハーンも『クレオール・スケッチ』の中で数多く描いたが、混血や黒人のクレオールの居住地区にはついてまわる問題だったのかもしれない。さらに「ハバナくじ」については、ハーンもくじに当たったら、本屋を開業したいと述べており、くじが人々の関心事になっていたことがうかがえるだろう。

この後、長編の『グランディシム一族』が出る。19世紀初期を舞台にしたこの長編では、ニューオーリンズに住むクレオールの名門一族（架空）の二家の抗争の結末が描かれる。

この物語の冒頭で、すでに一方の家は決闘に破れて当主が亡くなったことから、落ちぶれてしまっている。もう一方の勢力をふるっている一族としてのグランディシム一族の行く末を、当主とその家族の恋愛を交えて描いた壮大な物語である。当主は白人だが、その母親違いの兄（混血）と一族の人々、ならびに夫が決闘に敗れて土地すべてをグランディシム一族にとられてしまった未亡人とその娘、また北部から移民してきたものの家族を疫病で失い、薬局を開いたドイツ系の青年がこの恋愛模様にかかわってゆく。結局、白人クレオールの当主、並びにドイツ系の青年の二人は恋を成就させるが、当主の混血の兄は命を落とすことになる。

物語は白人クレオールの掟や行動様式が語られるのみならず、周辺には混血や黒人奴隷も登場す

る。ケイブルはとくに大きな紙面を割いて「ブラークペ」（腕を切られたもの）の話をしている。アフリカから連れてこられた誇り高き黒人奴隷の、その拷問死までの物語が挿入されている。ケイブルのこの「ブラークペ」は劇的に改変されているため、そのモデルとなった「ブラークペ」とは、いったいどのような人物だったのかという疑問がわく。

ハーンは「ブラークペの原型」（“The Original Bras-Coupé”⁽²⁴⁾）のタイトルで、実在したこの名称の人物について語っている。その話とは、プランテーションから逃げ出した黒人奴隷が、ニューオーリンズ郊外で山賊の一味に加わり、強盗を働いて住民を震撼させる。このミステリアスな山賊については、住民の間でさまざまな憶測を呼ぶが、仲間の裏切りで捕えられてみれば、しばらく前に近所でいなくなった黒人奴隷にすぎなかったというもの。

ハーンの「ブラークペ」に関する作品が出たことにより、『グランディシム一族』の中にある話が、どんなに脚色されているかがよくわかる。おそらくハーンは、ケイブル作品の真偽にピリピリしているクレオールの人々に、ケイブルの物語はあくまで創作なのだから、創作として読んでほしいと訴えているように思えてならない。『古きクレオールの時代』の書評『ケイブルのロマンスの舞台』では、登場人物とかかわる実際に残る地名や建物を検証して、その魅力をたっぷり紹介しているハーンであるが、この「ブラークペの原型」に関しては、むしろ実際とは大きく異なり、脚色されていることを読者に理解させるために筆をふるったのであろう。このあたりにも、ハーンとケイブルの関係が見えてくるように思われる⁽²⁵⁾。

ケイブルの作品は、短編にしる、この壮大な『グランディシム一族』にしる、描かれているのは、繁栄がすでに過去のものとなったクレオールの人々の暮らしぶりである。ニューオーリンズで、白人クレオールをはじめ、その混血や黒人など、すべてを見聞きして成長したケイブルだから、当事者のクレオールとは異なり、もっと冷静にその実情をとらえることができたのかもしれない。ただ、あくまでフィクションであり、作り話であるにも

かかわらず、当事者のクレオールは、そこに何らかの事実が潜むことを見逃さなかった⁽²⁶⁾。

1960年代、トルーマン・カポーティは『冷血』を“nonfiction novel”として発表したが、ケイブル作品の場合も、随所においてこれに近いものがあったのではなかろうか。あるいは『ルーツ』のアレックス・ヘイリーのいう“faction”（fact plus fiction）の片鱗が、ケイブルの作品に覗かれるのではなかろうか。そのあたりが、クレオールを刺激することになったのかもしれない。

ハーンとの関係については、すでに冒頭で述べたように、途中から次第に疎遠になっていった。しかしハーンに関していうならば、それは毎度のことでもある。ケイブルとの交流が途絶えてしまったのは、ケイブルがニューオーリンズを去って北部に行ってしまっただけでなく、彼が立ち去る前に、すでに二人の関係は悪化していたといえるかもしれない。ただ、それにしても、親しく交際した友人知人との関係の断絶にあたっては、ハーンが思い込みで気分を害し、一方的に手紙を出すのを止めるというような、独り相撲といった印象がぬぐいきれないのである。

人種の問題への関心から政治へと傾倒してゆくケイブルが、一足早く（1884年）にニューオーリンズを去っているだけに、二人の関係の顛末は想像の域を出ることはない。ただ、ハーンの人生を顧みた時、ケイブルとの数年にわたる交流がなければ、次の段階に進むことはできなかったようにも思われる。ケイブルは、ハーンを雑誌社に紹介した。さらに、『チタ』のような作品の成立を可能にしている。そればかりか、ハーンのクレオールへの関心の高まりは、ケイブルとの交流の産物であった。ケイブルの作品は、ニューオーリンズという町のガイド的な役割も果たしてくれたのである。一方、ハーンの見解もケイブル作品の流布に一役買っていることは否定できない。

地方色豊かな文学への入り口を教えてくれたのがケイブルであった。すなわち、ハーンにとってのニューオーリンズ時代を、文学修業の始まりとして位置付けるならば、その師匠の一人がケイブルだったといっても差し支えないだろう。

注

- (1) *The Writings of Lafcadio Hearn* Vol.13 (N.Y. and Boston: Houghton & Mifflin, 1922) 50-53. テューニソンやチェンバレンの発言がある。Oscar Lewis, *Lafcadio Hearn and His Biographers* (Westgate Press, 1930) ハーンとの断絶した関係と公式な伝記執筆資格を巡る争いに触れたもの。
- (2) Edward L. Tinker, *Lafcadio Hearn's American Days* (N.Y.: Dodd & Mead, 1924) 126-28. *The Writings of Lafcadio Hearn* Vol.14, 51-52. George Gould宛の書簡（1888年6月付）にハーンの小説のもとになった話がある。ハリケーンの被害にあい、助けられて、漁民に育てられるまでは同じだが、のちに裕福な身内が見つかる。親類の者は、レディにするために修道院にて教育を受けさせようとしたが、娘は逃げ出し、漁民と結婚して南の地域で子供にも恵まれ暮らしているというもの。Lafcadio Hearn, *Chita: A Memory of Last Island with an Introduction by Arlin Turner* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1956) なお、このハーンの『チタ』に付記されている、アーリン・ターナーの序文には、ハーンとケイブルの関係についても詳細な説明がある。
- (3) Arlin Turnerの前掲の序文。11-12.
- (4) Arlin Turner, *George Washington Cable*, (Baton Rouge: Louisiana State Univ., 1966) 235の注。ティンカーやベラ・マクウィリアムズは、ハーンがケイブルの承諾を得ないで『チタ』を書いてケイブルを怒らせたというが、ターナー自身はケイブルがハーンについて否定的な意見を記したものを見ていないと述べている。
- (5) 『ジャナ・ボ克蘭』に関しては、Edward L. Tinker, 122. 南部の理想的なイメージについての話は、梅本順子、『未完のハーン伝』（大空社、2002）133.
- (6) ed. and with an Introduction by Lawrence N. Powell, “Introduction: A Novelist Turns Historian,” *The New Orleans of George Washington Cable: The 1887 Census Office Report*, (Louisiana State

- Univ. Press, 2008) 18. この論全体が、ケイブルの歴史家への転身について述べている。歴史家としてのケイブルは、白人クレオールの人種主義などと敵対した。1884年に発表したその主張で、それまで、ケイブルをかばってきた友人たちとも袂を分かつことになったという。
- (7) *The Writings* Vol.13. 177. 180-81.
- (8) 梅本順子「ラフカディオ・ハーンと『新アタラ』: 宣教師ルーケットとの交流を中心に」『国際関係研究』Vol.23, No.3 日本大学国際関係学部国際関係研究所, 2002.
- (9) Arlin Turner, 102.
- (10) Arlin Turner, 102.
- (11) John Cleman, *George Washington Cable Revisited* (N.Y.: Twayne Publishers, 1996) 79. ならびに前掲のLawrence N. Powellによる序文“Introduction: A Novelist Turns Historian”
- (12) L. Hearn, “*The Grandissimes*,” *The Item*, September 27, 1880.
- (13) Arlin Turner, 199, 204.
- (14) Arlin Turner, 199-201. 前掲のLawrence N. Powellによる序文10-21.
- (15) Leona Queyrouze Barrel, *The Idyl: My Personal Reminiscences of Lafcadio Hearn* (Hokuseido, 1933).
- (16) *The Writings* Vol.13. 220. 332.
- (17) *The Writings* Vol.13. 332.
- (18) Lafcadio Hearn, ed. by Sanki Ichikawa, *Essays on American Literature* (Hokuseido, 1929) 74. 初出は *The Item*, May 26, 1881.
- (19) *Essays on American Literature* 104. 初出は *The Times-Democrat*, December 31, 1882.
- (20) Arlin Turner, 234. *The Writings* Vol.13, 290.
- (21) L. Hearn, “The Scenes of Cable’s Romances” *Century Magazine*, November, 1883.
- (22) *The Writings* Vol.13. 283.
- (23) Alice Hall Petry, *A Genius in His Way: the Art of Cable’s Old Creole Days* (London & Toronto: Associated Univ. Press, 1988) 126.
- (24) *Essays on American Literature* 58-61. 初出は *The Item*, October 27, 1880.
- (25) Barbara Ladd, *Nationalism and the Color Line in George Washington Cable, Mark Twain and William Faulkner* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1996) 56. ラッドは「ブラークベ」については、ハーンの記事とも異なるとして、次のように述べている。「南北戦争の前に書かれた逃亡奴隷について説明するとなると（歴史家であるケイブルにとってはなじみのあるものだが、ハーンにとってはそうでないものの）、話は全く異なっている。1837年7月19日のニューオーリンズの『ピカユーン』紙は紙面を割いて、スクイアー（ブラークベのモデル）の死を報道した。この南北戦争前になされた説明によると、ハーンのものとは異なり、逃亡者たちと暴動を起こした奴隷とを結びつけた。『ピカユーン』の記者は、スクイアーを「沼地の山賊」あるいは黒人の無法者を束ねて支配し、黒人奴隷に主人のもとを離れこの群れに加わるようそそのかす「悪名高い黒人のならずもの」だとした。その記事は、スクイアーの死で、町の周辺に広がる沼地に住む悪党が一掃されることを期待するとしている。」
- (26) ed. by Arnold R. Hirsch and Joseph Logsdon, *Creole New Orleans* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1992) 176-77.